

特集 金燈籠



現在の金燈籠（三代目）

●はじめに

町中の中央一丁目(旧、上町)に立つ金燈籠は、今年で初代建立から200年の節目を迎えます。200年にわたり明かりを灯し、この町を見つめてきた金燈籠ですが、その間には戦争での供出や再建など、様々な物語がありました。

今回の特集では、金燈籠の歴史を簡単に振り返っていきます。

●街道と大田原宿

慶長8年(1603)に幕府を開いた徳川家康は、各地に街道と宿場の整備を命じました。特に、東海道・中山道・日光道中・奥州道中・甲州道中の五つの道は五街道と呼ばれ、特に重要視されました。宿場が整備されていく中、大田原宿は、宇都宮と白河を結ぶ奥州道中の宿場として設けられました。

元々大田原の町は、天文12年(1543)に大田原資清が前室郷に大田原城を築いた後、城下町として整備され、江戸時代になると、大田原氏が治める大田原藩の城下町として栄えました。

一方で大田原は、戦国時代末期には豊臣秀吉や上杉景勝も宿泊するなど、奥州と関東を結ぶ街道の拠点でもありました。そのため奥州道中の宿場町・大田原宿として整備され、機能しました。

この宿場町に、江戸時代後期の文政2年(1819)、金燈籠は建立されました。

●金燈籠の建立

文政2年(1819)10月、町の中心地・上町に、町内の安全と、街道を行きかう人々の道中の安全と心の安らぎを祈願して、金燈籠が建立されました。この建立は、町年寄の岡本角左衛門、町名主の津久井新助以下計38名の有志によってなされ、鋳物師は、鹿沼の小野口惣兵衛と藤原喜澄の二人でした。

建立後は常夜燈として、毎日欠かさず明かりが灯されたと言われています。また、奥州道中の道しるべでもあったため、台座には「上町」・「江戸」・「白川」と彫られていました。これらの文字は、現在の三代目金燈籠にも刻まれています。

以降、金燈籠は街道を行きかう旅人の道しるべとして、また、町民には町のシンボルとして、江戸時代、さらには明治・大正時代を通じて、多くの人に愛されてきました。

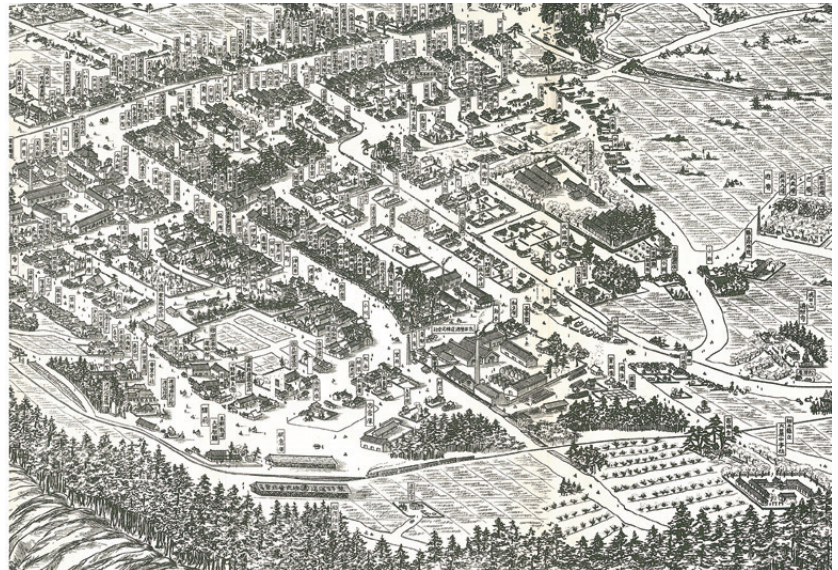
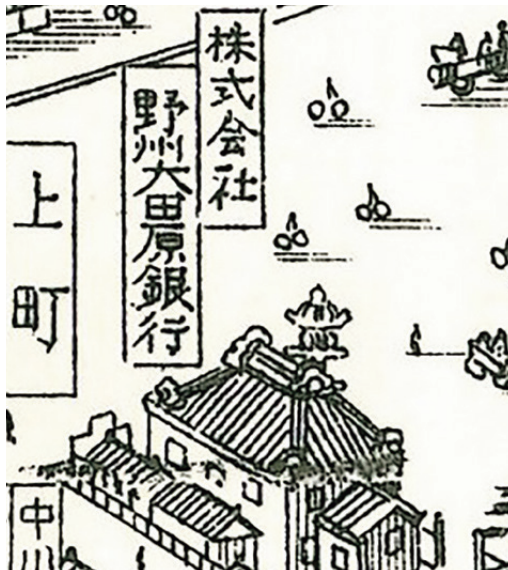
しかしながら太平洋戦争によって、その歴史は幕を閉じることとなります。



明治後半の金燈籠周辺



明治後半の金燈籠と大田原銀行(『栃木県営業便覧』より)



大正 13 年の大田原町を北側から俯瞰した鳥観図「大田原町真景」(右) とそこに描かれた金燈籠(左)



応召直前の金燈籠

●戦争と金燈籠

昭和 12 年(1937)に開戦した日中戦争や昭和 16 年(1941)開戦の太平洋戦争が激化し物資が不足していくなか、戦争で使う資源を集めるため、金属回収運動がはじまりました。

大田原でも金属回収運動は進められ、鉄柵・銅製の仏像・梵鐘などが次々と回収されました。このなかには、大田原城や大田原町で使われていた梵鐘(時の鐘)などの、貴重な文化財も含まれていました。

金燈籠も例外とはならず、昭和 17 年(1942) 12 月 15 日、応召(戦地に赴くこと)されることとなりました。応召にあたって開かれた告別式には、神官が呼ばれ、多くの市民が参列しました。なお応召にあたり、金燈籠と管理者の菊地二郎から建立者の子孫に宛てた決別状が遺されており、「皆さまの盛大な見送りに感謝し、第一線では身命を賭して奉公する」、「戦争が終わり凱旋した暁には、よりいっそう皆さまのために奉公する」と書かれています。

この応召により、建立より 124 年の長きにわたって大田原をみつめてきた金燈籠の歴史は、いったん幕を閉じました。

拜啓向寒之候御なじみ深き皆様には益々御健勝之
段奉慶賀候
陳者拙者儀文政二年十月吉日より上町に誕生し本
日迄百二十四年間各位の商賣繁昌を祈願し職域奉
公に微力を致し居り候處現下大東亞戦争之最只中
に在り今回金屬回収の召に應じて出發せんとする
に際しては東京諸新聞に迄報道せられ感慨轉た無
量なるもの有之候之に加ふるに盛大なる御歡送を
蒙り感激禁する能はず、第一戦に参りましては身
命を賭して御奉公致すべく候間留守中皆様も
商賣繁昌之第一義たる「客に親切、正直」
を以て銃後の護りを固め被下度不肖も亦武運芽出
度凱旋の暁には尙一層皆様の爲め御奉公致す覺悟
に候間御健康を保持せられ戦争完遂の爲め御盡力
被下度奉懇願候
先は書中を以て御缺別之辭を申上げ御禮御挨拶申
上候
昭和十七年十二月十五日
金燈籠 拜
管理者 那須郡大田原町上町
第三區長 菊池二郎
第三區建立者御子孫

金燈籠の決別状（「金屬回収綴」より抜粋）

「金燈籠決別状」釈文
拜啓向寒之候御なじみ深き皆様には益々御健勝之
段奉慶賀候
陳者拙者儀文政二年十月吉日より上町に誕生し本
日迄百二十四年間各位の商賣繁昌を祈願し職域奉
公に微力を致し居り候所現下大東亞戦争之最只中
に在り今回金屬回収の召に應じて出發せんとする
に際しては東京諸新聞に迄報道せられ感慨轉た無
量なるもの有之候之に加ふるに盛大なる御歡送を
蒙り感激禁する能わず、第一戦に参りましては身
命を賭して御奉公致すべく候間留守中皆様も商賣
繁昌之第一義たる「客に親切、正直」を以て銃後の
護りを固め被下度不肖も亦武運芽出度凱旋の暁に
は尙一層皆様の爲め御奉公致す覺悟に候間御健康
を保持せられ戦争完遂の爲め御尽力被下度奉懇願
候
先は書中を以て御決別之辭を申上げ御礼御挨拶申
上候
昭和十七年十二月十五日
金燈籠 拜
管理者 那須郡大田原町上町
第三區長 菊池二郎
第三區建立者御子孫



解体された金燈籠



告別式の様子

●二代目金燈籠の建立

戦後の復興が進む中、金燈籠を惜しむ声があがりました。そこで、益子万吉初代市長を中心とした有志によって、金燈籠再建を目指す百人講が組織され、再建に向けて動き出しました。そして、昭和30年（1955）7月に、初代金燈籠と形や制作年代が似ていた三斗小屋の燈籠を譲り受け、再建されました。初代の応召から、13年後のことでした。



昭和30年頃の二代目金燈籠

●三代目金燈籠といま

二代目金燈籠は、当初は交差点の真ん中に建立されました。しかし、車の衝突事故が多発したため、昭和35年（1960）に交差点の隅に移されました。以降、18年間にわたって町の発展を見守ってきましたが、昭和53年（1978）に当時の黒磯市に返還されました。

昭和54年（1979）、金燈籠建設委員会や地元有志の尽力により、初代そっくりの金燈籠が再建されました。再建後、金燈籠は長らく交差点の片隅にひっそりと佇んでいましたが、平成23年（2011）10月に「金燈籠ポケット公園」として整備されました。

現在では、町のシンボルとして、また市民の憩いの場として親しまれているほか、毎年4月下旬に行われる大田原屋台まつりでは、クライマックスの「ぶつつけ」が金燈籠交差点で行われています。

文政2年 (1819)	初代金燈籠が、大田原宿の上町に建立される。
昭和17年 (1942)	金属回収運動により、供出される。
昭和30年 (1955)	二代目金燈籠が建立される。 (三斗小屋から燈籠を譲り受け、再建する)
昭和35年 (1960)	交通障害のため交差点の中央から角へ移設される。
昭和53年 (1978)	二代目金燈籠を旧黒磯市へ返還する。
昭和54年 (1979)	三代目金燈籠が建立される。
平成23年 (2011)	金燈籠ポケット公園が整備される。
令和元年 (2019)	初代建立から200年の節目を迎える。

金燈籠の歴史

このように、金燈籠は200年の歴史の中で、戦争での応召や自動車の妨げとなったため移転を余儀なくされるなど、幾度か悲劇にみまわれてきました。しかしながら、その度に有志の努力によって、また町の人々に愛されてきたことで、今日まで遺されてきました。建立から200年の間、金燈籠から見える景色や状況は大きく変わりましたが、金燈籠は現在も道行く人々の安全やこの町の発展を祈願しながら、今日もこのまちを見守っています。



金燈籠と金燈籠交差点